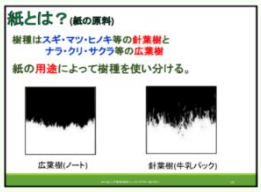
活動紹介

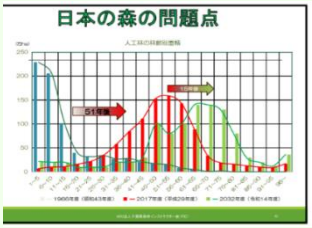
NPO 法人千葉県森林インストラ（クター会

講座名	ステップアップ講座「紙を訪ねて２千年」～たかが紙されど紙～紙の歴史と環境問題）		
開催日時	２０２４年　５月２３日（木）　　１８時４５分　～　２０時４５分		
開催場所	船橋市中央公民館　　第８集会室	参加者	８名

活動概要：元製紙会社勤務、紙のことを長年紹介し続けてきた紙のプロに話を伺った。●紙の歴史…紙は文明のバロメーター　紙の発展は、宗教の拡大のための経典需要や官僚組織の意思伝達手段としての需要、文書・絵画文化需要、更に建材需要、そしてそれらの必要性と共に拡大していった。紙以前の文字の記録は、竹簡、粘土板、パピルス等様々なものになされてきた。しかしながら、紙は持ち運びや収納などの点で優れ、文明を大きく進める要因となっている。紙は、古代中国で発明され、紀元前２世紀頃には原型があったが、その製法がヨーロッパへ伝わるまでには１千年以上かかった。要因は中国周辺には、工場で生産をする習慣の無い遊牧民や文字の伝達を必要としない民族が多かった為。その後七百年程経ってイスラム勢力と衝突し、初めて文明同士の接触があった。そして、イスラム教の布教と共に紙（コーラン）の需要が増大した。ヨーロッパに定着した紙の製造はキリスト教の広まりと文書の増大と相まって拡大した。産業革命では製紙業も機械化されている。1798 年にフランスで抄紙機が発明されたが、ここで深刻な原料問題が出てきた。1833 年イギリスで製紙原料を木材繊維（木質部）からとれるようになった。これが洋紙の始まり。日本では明治維新による西洋化の動きで 1874 年に洋式の製紙会社が誕生した。●和紙の歴史…紙漉きの始まりは明確ではない。少なくとも曇徴来日（６１０年）を機に紙漉き（原料は麻・楮等）が発展したのは事実であろう。日本においても仏教の発展と共に紙需要が拡大した。 平安時代には、原料に雁皮を使用し日本独特の**流漉き製法の確立**がなり、品質の良い紙が作られるようになった。どの時代でも原料不足が発生し、奈良平安時代では紙の裏を再使用し再生紙(薄墨紙)が作られるようになった。江戸時代では紙屑屋が盛んとなり、再生紙が盛んに作られるようになった。

●現在、洋紙はその用途により、原料である樹種を使い分けている。そこで、今回の講座では、針葉樹で作った紙と広葉樹で作った紙とをちぎる体験を行った。針葉樹の繊維は長くちぎりにくくなっているので、丈夫さが大事なもの（牛乳パック等）に使用され、広葉樹の繊維は短いので、滑らかさが大事なもの（ノート等）に使用されていることが実感をもって理解することができた。●世界の森林の現状…世界の森林面積は 毎年 330 万 ha 減少（2010～2015 平均）→日本の国土面積の約 1/10 相当●日本の森林の現状…戦後の拡大造林により、天然林を切って針葉樹を多量に植えたものの放置されているため、荒廃してきている（森林飽和）。このままでは、生物多様性も喪失し、木はなくなっていくため対策を必要としている。樹齢ごとに量が均等になるような伐採が有効。木は伐採しても新しく苗を育てることで炭素吸収量を増やすことができる。●紙の環境問題… 日本の古紙回収率は７９．５％世界でもトップクラス。段ボールの回収率では９５％以上。素材別に回収することがリサイクルのためには大切なこととなる。FSC 認証マーク等多くの環境マークも紹介された。「日本での頑張り、素晴らしさをいくつも知ることができうれしかった。」「木は切ってもエコ」等の感想が寄せられました。





講師　　板倉完次

本サイトの記事・画像等の無断転載は禁じます。

（作成：西河内　ひとみ）ver2024